

浅海に定置した火砕流堆積物と岩脈

日本海に突き出た島根半島と中国山地との間の低地である宍道低地帯の南縁延長上にあたる5万分の1地質図幅「石見大田及び大浦」地域には、海岸に沿って、大森層とよばれる中期中新世の浅海複合火山体とその山麓に形成された扇状地三角州堆積物が分布しており(本号、5万分の1地質図幅「石見大田及び大浦」の紹介文参照)、その中に火砕流堆積物や岩脈などが認められることがある。それらは、水との相互作用で、液状化あるいは流動化して定置していることが多い。

<地質調査所 地質部 鹿野和彦>



1. 浅海に堆積した砂岩と砂岩との間に認められる火砕流堆積物。底部部の約1-2mは、かすかに成層した安山岩火山礫岩で、その上に厚さ10mで塊状のデイサイト軽石火山礫凝灰岩が重なる。その中には不規則な形状のスパイラルに類似した構造が発達する。直下の火山礫岩に由来する火山礫が濃集したこの構造は、火砕流が流走中に取り込んだ水が火砕流の熱で水蒸気になって爆発的に膨張して生じた可能性が高い。



2. 扇状地三角州堆積物を構成する凝灰岩ないし凝灰角礫岩に貫入した安山岩岩脈。岩脈は枝分かれしながらも水冷破碎している。また、枝分かれした先端部では母岩の凝灰岩と入り混じり、その付近の母岩も流動化して細粒の部分と粗粒の部分とが分離して岩脈の方向に延びている。